2020 年 10 月 31 日　発行
九州産業大学『国際文化学部紀要』第 76 号　別刷

篠原助市の教育学におけるニーチェ受容とその特質（1）

―1920 年代の著作『批判的教育学の問題』,『教育辞典』,『理論的教育学』を中心に―

九州産業大学国際文化学部　教授
松 原 岳 行

『九州産業大学国際文化学部紀要』，第 76 号，45-70，2020
KYUSHU SANGYO UNIVERSITY, *Faculty of International Studies of Culture* No. 76, 45-70, 2020

【論文】

篠原助市の教育学におけるニーチェ受容とその特質（1）

―1920年代の著作『批判的教育学の問題』,『教育辞典』,『理論的教育学』を中心に―

松　原　岳　行

はじめに

ドイツの場合，教育家でも教育学者でもないニーチェ（Friedrich Nietzsche, 1844-1900）の思想が教育学にどう受容されてきたかに関しては，ニーマイヤーを筆頭編者とする研究論文集『教育学におけるニーチェ？』（Niemeyer u.a.1998）をはじめ，ホイヤーの著作『ニーチェと教育学――著作，伝記，受容』（Hoyer2002）やニーマイヤーの単著『ニーチェ，青年と教育学』（Niemeyer2002），また拙著『教育学におけるニーチェ受容史に関する研究――1890-1920年代のドイツにおけるニーチェ解釈の変容』（松原 2011）などの研究成果により，ある程度その実態や意味は解明されたと言える。こうした研究成果の蓄積に基づき，ドイツではニーチェ思想の教育学的意義を再検討する作業もすでに行われている[註1]。

ところが，日本の教育学はいまだにニーチェ受容の歴史にほとんど関心を示していない。もっとも，高山樗牛（1871-1902）や登張竹風（1873-1955）らによる美的生活論争に象徴されるように，日本文学においてニーチェ思想が流行した事実についてはよく知られており，この分野に関してはすでに一定の研究蓄積もある[註2]。しかし，高山樗牛と同時代を生きた近代日本の教育学者らによるニーチェ受容については，彼らにニーチェの名を冠した論文や著作がほとんどないこともあってか，両者の接点すら認知されておらず，非教育学的なニーチェ思想が教育学とどのような関係を結んできたのかを解明する作業も進捗していない。その結果，ドイツとは対照的に，日本においてはニーチェ思想の教育学的意義を本格的に検討した研究成果が十分には示されていないのである[註3]。

このような問題関心から筆者は，日本の教育学におけるニーチェ受容史という未開拓の研究に着手すべく，数年前から近代日本の教育学者らの著作物資料を収集しはじめ，現在までに中島半次郎（1871-1926）および長田新（1887-1961）によるニーチェ受容の実態と特質について明らかにしている（松原 2020-a，松原 2020-b）。しかし，各教育学者によるニーチェ受容の個別事例を比較分析し意味内容を相互に解明するためには，さらなるサンプルが必要であろう。また，ディシプリンとしての日本の教育学と非教育学的なニーチェ思想との関係性の検討を研

究の最終目標に据えるなら，教育学という学問の構築に自覚的であった教育学者によるニーチェ受容の事例が有益なサンプルになると思われる。そこで本研究では，近代日本の教育学を牽引した人物として名高い篠原助市（1876-1957）に注目し，彼の教育学形成過程とニーチェ思想との関わりについて考察することとするが，考察範囲や課題を焦点化するために，まずは関連する先行研究を整理しておこう。

篠原助市の功績および意義について，たとえば梅根悟は次のように評している。「篠原助市は日本がこれまでに生んだ，数少ない，すぐれた教育哲学者または教育学者の一人であり，最もすぐれた教育学者と称しても，たぶん不当ではないかもしれない。彼以前にも，また彼以後にも，教育学者をもってみずから任じ，ひとも許した人が数多くあるにしても，彼ほどに深く教育の本質に向かって哲学的探究のメスを入れ，そのことに命をかけた学者はいなかったように思われるし，その生みだした教育学的業績の量と質においても彼に匹敵する人はなかったと考えられる。その人の，その国での教育学史における地位としてみるなら，彼の日本におけるそれは，ドイツにおけるヘルバルト，アメリカにおけるデューイー（ママ）に比すべきものであるかもしれない。」（梅根1970，219頁）

林博常も以下のように篠原助市を高く評価する。「篠原助市（明治九，一八七六～昭和三十二，一九五七）が近代日本の有力な教育学者であったことはよく知られたところであるが，その思想及び理論の影響において，教育学史上貶することのできない存在である。科学的教育学の建設と，そこに基づいた実際的教育学の構築とは，彼の教育学研究畢生のテーマをなすが，科学的教育学の建設は当時の，即ち二十世紀前半期の教育学界世界的関心事であり，彼の研究はこの課題に答えようとしてなされている。その業績は日本教育学史上ばかりでなく，世界教育学史上において注目されてよいものである。」（林博常1981-a，65頁）

このように，教育学者としての篠原助市への高い評価は枚挙に暇がないが[註4]，その要因のひとつは，篠原が自らの教育学を「理論的教育学」と「実際的教育学」によって体系的に構想していた点に求められる。篠原教育学が「理論的教育学」と「実際的教育学」によって構成され，教育学形成の過程において前者から後者へと発展していったという点については，たとえば「篠原教育学は「理論的教育学」と「実際的教育学」を両輪として成り立っている」（木内1995，27頁）とか「篠原の教育学体系は理論的教育学と実際的教育学からなり，後者は前者の原理を具体化するものとして位置付いている」（江口2001，184頁）など，これまで多くの論者によって指摘されているほか，篠原自身も折に触れ自覚的に言及してきたとおりである。

では，篠原助市は「理論的教育学」から「実際的教育学」へと自らの教育学を構築する過程においてニーチェの思想をどのように受容したのだろうか。篠原助市によるニーチェ受容の詳

細は本論に譲らなければならないが，たとえば1922年の『教育辞典』においては「ニーチェ」の項目を掲載したほか，1930年の『教育の本質と教育学』では「教育者としてのニーチェ」という表現を用い，1947年の『独逸教育思想史』においては「ニーチェと「超人」の教育」という見出しを付してニーチェの教育学的意義について数頁に亘って論じるなど，教育学におけるニーチェ受容史上きわめて興味深い事例であることは間違いない。

ところが，篠原教育学におけるニーチェ受容をテーマにした先行研究は，管見の限り，篠原助市研究においてもニーチェ研究においても見出されない。それどころか，篠原助市がニーチェに何度も言及していることすら，ほとんど知られていない状況にある。唯一の例外と言えそうなのは，高橋勝の1982年論文「F.W.ニーチェ―『自己教育』思想の開拓者―」である。高橋はまず，ノールによる新教育運動の歴史記述，すなわち文化批判を中核とするニーチェ思想がドイツの新教育運動に影響を与えたという把握が，教育学におけるニーチェ評価の定説になりつつあると述べた上で（高橋1982，30頁），日本の教育学におけるニーチェ研究の不備を指摘する。そのような状況を踏まえ，高橋が自らの先行研究に該当する数少ない例外として取り上げたのが，篠原の1950年著作『欧州教育思想史』（上・下巻）である。高橋によれば，「この篠原のニーチェ把握は，通史という制約もあり，先に述べたノールの見解の域をほとんど越えていない」ものの，少なくとも日本においては「教育思想史の中で最もスペースをとって【※引用者補：ニーチェについて】論及している文献」と評価することができるという（高橋1982，31頁）。

しかし，高橋が言及した篠原の著作は1950年の『欧州教育思想史』にとどまり，1922年の『教育辞典』や1930年の『教育の本質と教育学』といった注目すべき著作が看過されている。また，唯一紹介している『欧州教育思想史』に関しても，ノールの歴史記述を踏襲していることがわずかに指摘されるだけで，篠原がニーチェ思想をどのように論じているのかについては言及がない。つまり，篠原教育学におけるニーチェ受容の実態や特質は，高橋による先行研究を含めたとしても，ほとんど解明されていないのである。

以上の問題関心から，本研究では，理論的教育学と実際的教育学とから成る篠原助市の教育学においてニーチェの思想がどのように受容されているのかの実態を明らかにするとともに，その特質や意味を検討することを課題として設定しているが，紙幅の都合上，本稿ではその前半部のみの掲載となる。本稿では，理論的教育学から実際的教育学へと展開していく篠原教育学のうち，理論的教育学の構築期に眼を向け，この時期の篠原がニーチェ思想をどう評価したのかを考察していく。具体的には，1910年に出版された共著の師範学校教科書シリーズから，最初の単著である1922年出版の『批判的教育学の問題』や『教育辞典』を経て，1929年の『理論的教育学』までを本稿の考察対象とし，1930年の『教育の本質と教育学』以降の著作は次

稿にまわすことにした。なお，1930年の著作『教育の本質と教育学』を篠原教育学の結節点とする理由については後に詳述する。

1．篠原助市教育学の形成過程
―本稿における考察対象領域の設定―

（1）篠原助市の略歴

ここではまず，主に梅根悟，林博常，米澤正雄らの先行研究に依拠しながら，篠原助市の簡単なプロフィールを確認しておく。

篠原助市は1876年，越智家の次男として愛媛県に生まれたが，幼少期に篠原家の養子となり，それ以来，篠原姓を名乗ることになった。小学校を卒業した後，私塾養正館に2年ほど通い，1893年，愛媛県尋常師範学校に入学した。1898年，師範学校を卒業した篠原は，愛媛県内の高等小学校に訓導として，2年後には尋常小学校に校長として勤務することとなった。

小学校教員として華々しいスタートを切った篠原だったが，向学心旺盛な彼は1901年，東京高等師範学校の英語科に進学することとなる。ただ，篠原は英語だけではなく，哲学や倫理学，教育学，心理学など，さまざまな講義を聴講し，知的好奇心を存分に満たしたとされる。1905年3月に同校を卒業，1年間研究科で学び，1906年4月からは福井師範附属小学校主事として勤務することとなった。

数年間は附属小学校主事の職務に専念していた篠原であったが，当時の教育界に蔓延していたヘルバルト派教育学の批判を展開していく中で，哲学や教育学という学問に対する知的好奇心が再燃し，1912年9月，京都帝国大学文科大学哲学科へ進学する。36歳のことである。西田幾多郎や朝永三十郎から哲学を学び，1916年7月に同大哲学科を卒業した篠原は，大学院で教育学を専攻し，ひとつ年上の小西重直（1875-1948）の指導を受けながら，本格的に教育学研究を開始する。

1919年には母校である東京高等師範学校で教育学の教授を務めることとなった。教育学者篠原助市の誕生である。この時期の篠原は，宝文館に依頼され1913年から執筆を続けてきた『教育辞典』のほか，1918年から1922年までに発表した諸論文を収録した著作『批判的教育学の問題』の出版準備に勤しんだ。篠原教育学の土台とも言うべき労作，『批判的教育学の問題』と『教育辞典』はともに1922年の出版である。

ところが，自著の出版を見届けることなく，篠原は海外へ留学する。具体的には，1922年2月からまずアメリカに向かい，カバリーやキルパトリックの講義を受けた。夫人の病気を見舞

うため一旦は帰国したものの，1922年12月からはフランスやドイツに留学した。とりわけドイツ留学中は，ナトルプ，リット，オイケン，ライン，フリッシュアイゼン・ケーラーらと面会したほか，ヴィネケンのヴィッカースドルフ自由学校共同体，ゲヘープのオーデンヴァルト学校など，新教育運動の先進校への訪問も果たした[註5]。

1923年に帰国した後は，東北帝国大学法文学部教授として勤務する傍ら，1929年に『理論的教育学』，1930年には京都帝国大学に提出された学位論文『教育の本質と教育学』を出版する。1930年4月からの10年余りは東京文理科大学教授として，篠原の言う「実際的教育学」の実現に向けた努力を始める。しかし，1934年1月から3年半ほどの間，篠原は東京文理科大学教授のポストを維持したまま，文部省教育調査部長の役職にも就く。ちょうどファシズムの嵐が文部省にも押し寄せてきた時期の仕事であった。この時期に出版されたのが，1938年の『教育断想：民族と教育其の他』や1939年の『教育学』，1942年の『教授原論：特に国民学校の授業』である。

戦後は，自らの教育学理論を再編成し，1947年著作『民主主義と教育の精神』，1947年著作『独逸教育思想史』（上・下巻）【1950年には『欧州教育思想史』（上・下巻）として再版】，1950年著作『訓練原論：道徳教育の原理と方法』，1951年著作『教育哲学』などを公刊，1956年には自伝『教育生活五十年』を出版し，1957年に他界した[註6]。

篠原助市は80年以上に及ぶその生涯においてニーチェの思想といったいどのように関わったのだろうか。以下では，いま列挙したような諸著作の中で，教育学者として篠原がニーチェの思想をどのように取り上げたのかを時系列的に検討していくが，それに先立って，本稿の考察対象領域を1929年の著作『理論的教育学』までとすること，換言すれば1930年の著作『教育の本質と教育学』を今回の考察対象から除外する理由について説明しておこう。

（2）理論的教育学と実際的教育学とのあいだ
―1930年著作『教育の本質と教育学』の位置―

先述したとおり，紙幅の制約から本研究のすべてを本誌に掲載することはできない。そこで，篠原教育学の形成過程に準拠するかたちで考察対象時期を理論的教育学と実際的教育学の時期とに大別し，本稿では前者の理論的教育学の時期における篠原のニーチェ受容に照明を当てるが，本格的な考察に入る前に，どの著作までを理論的教育学として数え入れるかを具体的に定めておく必要があろう。果たして理論的教育学から実際的教育学への転機はいつ訪れたと見るべきだろうか。

1929年著作『理論的教育学』が篠原教育学における理論的教育学であることは言うまでもないだろう。一方の実際的教育学に関して言えば，たとえば「本書は現在私の意図にある実際

的教育学の要項を簡単に叙述したものである」（篠原1939-a，序1頁）という書き出しで始まる1939年の『教育学』とか，「本書は実際的教育学の一部門として，教授の目的，内容及び方法の一般について述べたもので，大体四部に大別せられる」（篠原1942，序1頁）と述べられた1942年著作『教授原論：特に国民学校の授業』などは，完全に実際的教育学の範疇に属することは明らかである。

理論的教育学から実際的教育学への転換点を探る鍵は，1938年に公刊された『教育断想：民族と教育其の他』の「序」に求めることができる。なぜなら，篠原はここではっきりと「理論的教育学から実際的教育学に転ずるに当つて，私は，先づ，実際的教育学の根本問題と見らるべきものをつぎつぎに究明し，斯学に対する基石を拾ひ集めようと思ひ立つた」（篠原1938，序1頁）と述べているからである。ここで注意しなければならないのは，本書に収められた論文の多くが1932年に発表されたものであるという点である。こうした事情から，実際的教育学への転換点は1932年の論文「民族と教育」であると見なされてきた。

たとえば柳は次のように述べている。「篠原の教育学体系は，「理論的教育学」と「実際的教育学」からなっているが，両者の思想内容にはかなり大きな相異があった。かれは前者の著作を完成して，後者の本格的研究に着手するが，その転期は1932年に発表された「民族と教育」の論文にもとめることができる。」（柳1973，30頁）

また木内も1932年論文「民族と教育」が担う転換点としての役割を次のように強調する。「時代精神に大きく引きずられた，多くの教育学者たちとは異なり，篠原助市は，まず自己の活動を学問的な教育学の体系化に限定し，社会の変化にかかわらず，自分の学問的営為の連続性を保とうと努めた。しかし，一九三二（昭和七）年に公刊された「民族と教育」という，篠原の意図した「実際的教育学」に関する綱領的な論文のタイトルは，篠原の意味での「先験的」方法による教育学の運命を暗示している。」（木内2008，80頁）

このように，1932年の論文「民族と教育」が実際的教育学の出発点と措定されることで，ちょうどその前作に該当する1930年の『教育の本質と教育学』がこれまで自ずと理論的教育学の終着点と見なされる傾向にあった。実際，篠原自身も1929年著作『理論的教育学』の「序」において，「本書に挙げた一々の根本概念に対する哲学的基礎と，教育学の科学的性質とについては続いて刊行せらるゝ「教育の本質と教育学」に於てかなり精説して置いた。私は将来尚進んで，実際的教育学を著し，本書に挙げた諸原則の，個々の教育活動への具体的な適用について，私見を開陳したいと考へてゐる。」（篠原1929，序4頁）と述べており，1930年公刊の『教育の本質と教育学』が理論的教育学の一部であるかのような印象をうかがわせている。

しかし，たとえば米澤正雄は，篠原の「理論的教育学」の構想をめぐって1929年著作『理

論的教育学』と1930年著作『教育の本質と教育学』とのあいだにズレがあることを指摘する（米澤2015）。また，篠原自身の証言を注意深く読んでいくと，『教育の本質と教育学』は，理論的教育学でも実際的教育学でもない第三の立場[註7]であることがわかる。『教育の本質と教育学』の「序」の冒頭で篠原はこう述べる。「本書は別著理論的教育学及び将来刊行せらるべき実際的教育学と共に，私の教育学全体系の一部を形成する。」（篠原1930，序1頁）――ここでは「本書」（『教育の本質と教育学』）が，篠原教育学全体の一部を形成する重要な試みとして，別著『理論的教育学』や将来刊行予定の『実際的教育学』とは明確に区別される著作と位置づけられていると言えよう。

理論的教育学でも実際的教育学でもない第三の立場として位置づけられた1930年著作『教育の本質と教育学』は，いわば理論的教育学と実際的教育学とをつなぐ接着剤ないしジャンクション的な役割を担っているのではないか。本稿では，自立的科学としての教育学の構築を目指していた篠原教育学のいわば根幹に位置付けられるべき「理論的教育学」の考察に焦点化することとし，理論的教育学からどのように実際的教育学へと接合ないし進路変更が行われていくのか，また全体を通して篠原教育学の形成過程にニーチェの思想がどう関与していったのかについては，次稿の検討課題とする。

2．篠原教育学におけるニーチェ受容の前史

福井師範附属小学校主事在任中の篠原は，小川正行（1873-1956），佐藤熊治郎（1873-1948）とともに，師範学校教育科用の系統的教科書を執筆し，1910年には，『教育学』，『心理学』，『論理学』，『近世教育史』，『各科教授法』，『小学校管理法』を共著作として出版したが，これらの著作においてはニーチェへの言及が全く見られない。

たとえば『教育学』では，カント，ショーペンハウアー（ショペンハウエル），ヘルバルト，ロック，ルソー，コメニウス，ツィラー（チラー），ライン，アリストテレス，シラー（シルレル），ペスタロッチ（ペスタロチ），フレーベル，ゲーテなど【※括弧内は実際の表記（以下同様）】，諸外国の教育家や思想家もしばしば登場しているが，ニーチェは一度も触れられない。

また『近世教育史』の第2編「欧米の教育」では，第1章「希臘の教育」，第2章「羅馬の教育」，第3章「基督教の教育」，第4章「中世の教育」，第5章「第十五，第十六世紀の教育」，第6章「第十七世紀の教育」，第7章「第十八世紀の教育」，第8章「第十九世紀の教育」，第9章「欧米現時の学制及び教育の趨勢」という具合に，古代から20世紀初頭まで9章立てで西洋教育史が網羅的に概説されており[註8]，取り上げられている人物も，ソクラテス，プラトン，アリストテ

レス，コメニウス，ルター（ルーテル），メランヒトン，コペルニクス，デカルト，ベーコン，ラブレー，モンテーニュ（モンテーニ），ラトケ，コメニウス，ロック，フランケ，ルソー，カント，バゼドウ，カンペ，ロヒョウ（ロッヒヨウ），ザルツマン，ヘルダー（ヘルデル），ペスタロッチ（ペスタロチ），フィヒテ，シラー，ヘルバルト，スペンサー，ディースターベーク（ヂースステルウエッヒ），フレーベル，ヘルバルト，ツィラー（チラー），シュトイ（ストイ），ライン，ホーレスマン，ダーウィン（ダーウヰン），シュライエルマッヒャー（シュライエルマッヘル），ヴィルマン（ウイルマン），デーリング，ナトルプ，ベルゲマン，ベル，ランカスターなど，時代も地域もバラエティーに富んでいる。しかし，ここでもニーチェへの言及はない。

1910年の『教育学』および『近世教育史』の改訂版として，1912年には『新撰教育学』と『新撰近世教育史』がそれぞれ出版され[註9]，たとえば『新撰近世教育史』においては，社会学のコント（コムト）や実験教育学のライおよびモイマンなどが新たに登場しているが，ニーチェはここでも言及されない。篠原の著作にニーチェの名前が初登場するのは，1922年のことである。

3．篠原助市の教育学者デビューとニーチェ思想

（1）1922年著作『批判的教育学の問題』におけるニーチェ受容

1912年9月，36歳という年齢で京都帝国大学文科大学哲学科に入学した篠原は，1916年秋から同大学院で小西重直の指導を受け，1919年には東京高等師範学校の教育学教授に就任，教育学者としての第一歩を踏み出す。1922年に出版された2著作，『批判的教育学の問題』（篠原1922-a）と『教育辞典』（篠原1922-b）はちょうどこの時期に執筆された篠原の最初の仕事である。

> *私はまだ教育学について纏つた考を持つてゐない。今の所では一貫の態度で以て，教育各般の問題に接近しようと力めてゐるに過ぎぬ。批判哲学から授かつた眼で以て，まともに教育を睇めようと企てゐるに止まる。此の書に収めた論文は，書いた時から言つても，私の思想の傾向から言つても，其の一つ一つにかなりの隔りがあつて，固より首尾一貫したものでない。が，唯一つ，私の態度に於ては何の変りもないことを，ひそかに信じてゐる。私は批判的教育学の畑に，小さな鍬を入れる為に生まれて来た。若し態度までも改めることがあつたら，夫れは私の精神的死滅を意味する。（篠原1922-a，序1頁）*

『批判的教育学の問題』の「序」の冒頭で篠原はこのように述べる。批判哲学的な視座から教育を論じるという点においては一貫性を持っているものの，時期的にもテーマ的にもばらつきがあるということを篠原自身が認めている。実際，本書の目次を見れば明らかなように，本書

で扱われているテーマは，「最近の教育理想」，「生活準備と連続的発展」，「社会的教育学の概念」，「教育即生活論」，「創造的自由活動と類化」，「個性と教育」，「自由と創造と教育」，「教育の根本原理としての弁証法」，「学習動機としての論理的確信」，「愛と教育」，「ヂューイの教育論」と，じつに多種多様である。このうち，ニーチェへの言及が確認できるのは，第1論文「最近の教育理想」と第4論文「教育即生活論」である。

第1論文「最近の教育理想」は，小西重直に勧められて執筆された大学院時代の成果であり，1918年に早稲田同文館雑誌部から出版された尼子止編『最近教育学の進歩』の45～84頁にも収められた，いわば教育学者としての篠原のデビュー作である。自伝『教育生活五十年』の中で篠原は同論文の執筆経緯を次のように回顧している。

> *大正六年【※引用者補：1917年】の秋，小西先生から現代の教育について述べてみないかと勧められたので，「最近の教育理想」について鳥瞰図的に纏めて見ようと考えた。鳥瞰図的と言ったところで私の視野はあまりに狭かったので，何か手引になる参考書はないものかと図書室をあさってリンデ（1864－？）の「現代教育論争」（第一部と第二部に分かる）E. Linde；Pädagogische Streitfragen der Gegenwart.（1912）を見出し，大筋はこれに従い，まま私見を点加することにきめた。（篠原1987，208頁）*

篠原自身の証言によれば，「最近の教育理想」はリンデの『現代教育論争』に依拠しつつ，当時の教育理論や教育思想を俯瞰的に概説した論文である。篠原は後にこれを「つぎはぎ」と自嘲しているが（篠原1987，211頁），梅根悟は同論文を，「篠原が京都大学在学七年間の学習と思索の成果をうかがうに足る最初の労作であり，おのずからそこには彼の教育学の基本的な立場が見取り図的に示されているといっていいものである」（梅根1970，235頁）と評価している。では，この論文中にニーチェはどういうかたちで登場するのだろうか。

この論文中におけるニーチェへの言及は2箇所ある。

> *現代に於ける自由教育の最も有力なる主張者はエレン，ケイ女史である。女史は一九〇〇年「児童の世紀」なる一書を公にし，ルーソーの説を受け，之れに加ふるにニーチェの優者道徳説とダーキンの進化説とを以てし，自由教育の福音を世に叫んだ。（篠原1922-a，9頁）*

> *現今国民教育論者として特に名あるものはケルシェンシュタイネルとリュールマンとである。リュールマンは其の著「政治的教育」において独逸国民が政治に対して冷淡なるを罵り，独逸の哲学・宗教及び芸術，特にニーチェの如き個人主義の哲学が国民的精神に災せるを嘆き，此の絶滅に瀕せる愛国*

心を再び独逸国民の胸底に呼び起さんには，政治的教育に如くものがないとして，大に政治教育の必要を唱へた。（篠原1922-a，43-44頁）

ひとつ目は，スウェーデンの女流教育家エレン・ケイの『児童の世紀』にニーチェ思想の影響が認められるという事実であり，ふたつ目は，国民教育論者リュールマンがニーチェの思想およびドイツ国民に及ぼすその悪影響を憂慮したという指摘である。エレン・ケイの文脈では「優者道徳説」，リュールマンの文脈では「個人主義の哲学」という具合にニーチェの思想がそれぞれ特徴づけられてはいるが，ニーチェ思想に対する篠原自身の価値判断はなされていない。篠原がここで語っているのは，ケイにとってニーチェの思想が一定の役割を果たした一方，リュールマンにとっては批判すべき危険思想だったという点であって，篠原の主観的判断に基づかない客観的な事実だけである。

第4論文「教育即生活論」は，東京高等師範学校の教育学教授・文学士として執筆された1920年10月発表の仕事であり，『批判的教育学の問題』のみならず，1922年に文教書院から公刊された教育論叢編集部編『教育即生活論』の79～116頁にも収録された論文である。

この論文で篠原がニーチェに言及するのは，実用主義批判の文脈においてである。「実用主義に従へば，真理を決定する絶対的標準なるものはない」（篠原1922-a，140頁）と述べた上で，篠原はこう続ける。

…真理を決定する最後の標準は個々の個人の個々の経験であつて個々の個人は自己の一々の経験で以て直ちに真偽如何を任意に決定する権能を有する小さな神である。彼等は一々の経験によつて，真理決定の無上の権能を有するニーチェ流の超人である。如此はニーチェと共に善悪の彼岸，真偽の彼岸を説くものである。我々は斯かる超人に向つて最早争ふべき何物をも有せぬ。超人と我々凡人との争は要するに言議の埒を脱したものであるからである。（篠原1922-a，141-142頁）

篠原の論旨はおそらく，過度の実用主義が価値相対主義を招くことへの批判と見て差し支えないだろう。われわれにとって興味深いのは，価値相対化批判の文脈においてニーチェの著作『善悪の彼岸』や「超人」思想が取り上げられ，徹底的に批判されている点である。超人はまるで「小さな神」であるかのごとく善悪や真偽の彼岸において任意の真理を主張するが，自らに神の権能を与えるような勝手気儘な個人とは議論する気にさえならないとして，篠原は「ニーチェ流の超人」とまさに絶交するのである。

（2）1922年著作『教育辞典』における「ニーチェ」

小川正行，佐藤熊治郎とともに師範学校用教科書シリーズを出版していた宝文館から執筆依頼を受け，1913年以来コツコツと独力で書きためた成果が，1922年公刊の『教育辞典』である。篠原は同辞典の凡例において，「教育に関係ある術語をなるべく多く集録すること，説明に於て重複を避け，繁簡宜しきに合すること，叙述の公平にして，其の態度全巻を通じて変らざること等は，特に著者の苦心する所なり」（篠原1922-b，凡例1頁）と述べているが，梅根も指摘するように，「篠原の教育辞典は，その記述の正確さと，ボリュームの適切さのために広く歓迎されて，その後永く版を重ねて普及した」（梅根1970，241頁）ことから，この試みは成功を収めたと言える。当時の日本にはすでに何冊か教育辞典が存在していたとはいえ，若き教育学者の手になる――正確に言うなら京都帝国大学の学生時代に執筆された――単著の教育辞典であることは特筆しておくべきであろう。

しかし，さらに注目すべきは，この『教育辞典』に「ニーチェ」の項目が設けられているという事実である[註10]。すなわち，一方で，1922年著作『批判的教育学の問題』においてニーチェの「超人」思想を批判しているにもかかわらず，他方で，ニーチェを同年出版の『教育辞典』に掲載しているのである。『教育辞典』がディシプリンとしての教育学の象徴であるとするならば，篠原はこのとき意識的に，非教育学的な存在であるニーチェの思想を教育学に受容したとも言えよう。では，具体的に篠原はニーチェをどのように説明したのだろうか。以下，全文を引用する。

> *ニーチェ，フリードリッヒ，ヴィルヘルム　Friedrich Wilhelm Nietzsche（1844-1900）*
>
> *独逸の哲学者，ロエケルンに生まる。ナウンブルヒにて初等教育を受けたる後，ボン大学に入り，後ライプチッヒ大学に転じ，言語学及び哲学を研究す。一八六九年バーゼル大学文献学教授に任ぜられしが，健康を損ぜしが為，十年の後（一八七九年）之を辞し，各地に転地療養をなす。一八八九年救ふ可からざる狂者となり，十年の後病没す。*
>
> *ニーチエー（ママ）は革命の哲学者なり。権力意志の説をなし，宗教・道徳及び一切の伝説に反対して，自己肯定を高唱し，超人を以て其の理想とす。教育上，所々に散見せる意見を徴するも亦少数天才の出現を最も必要なりとし，学ぶよりも修養を重しとせり。されど其の教育説は特に独創的と称すべき程のものにあらず。（篠原1922-b，519頁）*

項目全体は2段落で構成されており，第1段落はニーチェの生涯について，第2段落はその思想およびその教育学的意義について，簡潔に説明されている。まず確認しておきたいのは，冒頭のラベリング，すなわち篠原がニーチェのことを端的に「独逸の哲学者」と紹介している

点である。当然と言えばそれまでだが，ニーチェはあくまでも哲学者であって，教育家や教育学者ではないということを篠原も自覚していた証しである。

第2段落の冒頭で篠原はニーチェを「革命の哲学者」とも呼んでいるが，果たしてニーチェ思想を具体的にどう説明したのか。まず「権力意志」および「超人」という代表的なキーワードによってニーチェ思想の全体図が示され，次にニーチェの教育観がコンパクトに紹介される。具体的には，①少数の天才が出現することを最重要課題と見なしたことと，②知識伝達型の学びよりも人間形成的な修養を重視したことの2点である。教育家や教育学者ではないが，哲学者ニーチェにもじつは教育観があるという事実を広く世に問うと同時に，ニーチェ思想に一定の教育学的意義を認めた発言と見てよいだろう。

先述したように，篠原は『教育辞典』の編纂方針として「教育に関係ある術語をなるべく多く集録すること」（篠原1922-b，凡例1頁）を挙げている。「なるべく多く集録」ということで境界線上に位置していたニーチェが辛うじて拾われたという側面もあるだろうが，そもそも教育に無関係な人物や思想までもが無条件に掲載されたとも考えにくい。篠原は紛れもなくニーチェを「教育に関係ある」存在と見なし，教育学にとってニーチェの思想が一定の意味を有することを認めた。ニーチェに対して篠原は決して無関心ではなかったのである。

しかし，その評価は厳しいものであった。それは，ニーチェの項目を締めくくる最後の一文「されど其の教育説は特に独創的と称すべき程のものにあらず」に集約されていよう。一般に哲学者と見なされるニーチェに「教育説」が存在するという点は好意的に評価されていると言えるが，教育学的な観点からその内容を評価した篠原は，ニーチェの教育説を「特に独創的と称すべき程のものにあらず」と一刀両断に切り捨て，教育学的見地からニーチェ思想を取るに足らないものであると判断したのである。

4．篠原の理論的教育学におけるニーチェの位置

前述したように，篠原は，最初の単著となる『批判的教育学の問題』の出版を見届けることなくアメリカ，フランス，ドイツへと外遊する。「此の時に当つて外遊の命を受け，図らずも私の思想を転じ得る，少くも（ママ），私の思想を一層弾力のあるものに改め得るの機会に遇つた。夫れで此のターニングポイントに立つて，今迄に発表した論文を纏め，私の進み行く道の一里塚を立てて置かうと漸くにして決心した。」（篠原1922-a，序2頁）――同書の「序」で篠原はこのように述べている。篠原が留学を「ターニングポイント」と位置づけ，自らの思想発展の好機と捉えていることは明らかであろう。なかでも，ナトルプ，リット，オイケン，ライン，フ

リッシュアイゼン・ケーラー，ヴィネケン，ゲヘープなど，当時の代表的教育学者や新教育運動の中心人物との出会いを果たしたドイツ留学[註11]は，その後の篠原教育学の学説形成にとって重要な役割を持つとされる。では，『批判的教育学の問題』を一里塚としつつ，篠原は帰国後，どのような理論的教育学を構築したのであろうか。

（1）1926年の著作『教育学綱要』および『哲学綱要』におけるニーチェ受容

師範学校専攻科の教科書として編纂された単著『教育学綱要』（篠原1926-a）は，1926年に宝文館より公刊された[註12]。本書には1箇所のみニーチェへの言及が確認できる。具体的には，1922年の『批判的教育学の問題』第1論文「最近の教育理想」における文章をほぼ踏襲した，「リュールマンは其の著「政治的教育」に於て，独逸の国民が政治に冷酷なるを罵り，ニーチェの如き個人主義的哲学が国民的精神に及ぼせる悪影響を嘆き，此の絶滅に瀕せる愛国心を再び独逸国民の胸底に呼び起すは，政治的教育を措いて他に之を求むることが出来ないと論じた」（篠原1926-a，119頁）というものであって，リュールマンがニーチェの個人主義哲学の流行を憂慮したことをただ客観的に伝えているだけである。

「最近の教育理想」との対比ということで注目したいのは，エレン・ケイの著作『児童の世紀』を紹介する際にニーチェが援用されていないという点である。具体的には，次のとおりである。

> *啓蒙時代の合理主義への反動は，ルーソーの感情主義・個人主義に於て已に之を見る事が出来る。彼は社会の悪影響に反抗して，児童の性能の内部的な自由な発展を，教育小説エミールに於て宣伝した。併し彼よりも尚一層極端に，児童の権利と其の不可侵を主張したのは現世紀の初頭に現れた，エレン，ケイ女史の「児童の世紀」（一九〇〇年）である。女史は稀に見る熱情を以て児童の純潔と無垢とを嘆美し，児童の有する特性を損はず，自由に発展せしむべきを説いた，「教育の最大秘密は教育せざるにある。」とは女史の教育説の最高原則である。（篠原1926-a，9-10頁）*

1922年著作では，ルソーやダーウィンと並び「ニーチェの優者道徳説」が『児童の世紀』に影響を与えたことが指摘されているのに対し（篠原1922-a，9頁），1926年著作では，ニーチェとダーウィンの名前が削られた格好である。

『教育学綱要』の姉妹編として編纂されたのが『哲学綱要』（篠原1926-b）である。本書において篠原は，実用主義の特徴のひとつとして「真理の相対観」を挙げ，「ニーチェも真理は之を評価する主観に関してのみ存する，「自分を破滅に導くものは自分に取つて真ではない。」所謂「誤まつた」判断でも，夫れが有用であるときには価値を有する。問題は夫れが如何に良

く生活を増進し，生活を保存し，種属を保存するかと言ふ点に存すると説き（…後略…）」（篠原1926-b，82頁）などと，ニーチェの真理観を紹介する。また，価値についての議論においては，「ニーチェは価値を，意志の力を向上せしむる度に応じて評価し，勢力に充ちた生活が，根本的価値を表現するとした」（篠原1926-b，140頁）と述べ，ニーチェの価値観に言及する。しかし，『哲学綱要』におけるニーチェへの言及はこの2箇所のみである。

（2）1929年著作『理論的教育学』におけるニーチェ受容

1929年出版の著作『理論的教育学』は，東北帝国大学法文学部教授として教育研究活動をすすめる中でまとめられた著作であり，理論的教育学と実際的教育学とから成る篠原教育学の大きな柱のひとつである。林博常は，1926年著作『教育学綱要』の凡例において本書の刊行が予告されている点などを考慮し，『理論的教育学』の具体的な執筆時期を1926年前後と推測している（林博常1981-d，84-85頁）。

さて，篠原は本書の「序文」冒頭で次のように述べる。

> *理論的教育学と実際的教育学との区分は已に前世紀から存するが，二者が明かに分離し，理論的教育学が一の自立的科学として研究せらるゝに至つたのは，最近十数年，教育学の科学的性質に関する研究が勃興してからの事であつて，其の発達や尚極めて幼稚である。此の時に当つて，非才を顧みず，理論的教育学の系統的な叙述を試みようとするは，かなり大胆な冒険であり，或は斯学に対する一種の冒涜であると考へられぬでもない。併し，私は此の冒険を敢えて遂行した。教育の意味及び本質に対する理論的思考から出発しないで，教育学を単に一定の目的に達する規準の学と見るかぎり，其の自立は永遠に望まれ得べくもない。（篠原1929，序1頁）*

実際的教育学と理論的教育学とを明確に区別し，理論的教育学を一個の自立的科学として研究することの意義と必要性を訴えようとする篠原の主張は明らかであろう。ここには「理論的教育学の系統的な叙述を試みようとする」という意図がはっきりと示されている。では，篠原教育学の根幹とも言うべき「理論的教育学」の中でニーチェはどのように登場するのか。

> *是れルーソーに，消極主義の教育，ヴィネケンに「青年文化」„Jugendkultur“の力説ある所以である。ヴィネケンは実に「伝来の価値からの独立，過去からの独立に迄の教育，無歴史的思想（ニーチェの意味に於て）に迄の教育」を其の「自由に迄の教育」の四綱領の一に数へてゐる。併し，所謂消極的教育なるものが，果して，厳密な意義に於て，存在し得るか。伝来の文化価値からの独立が果して如*

実に実行せられ得るであらうか。（篠原1929，253-254頁）

1929年著作『理論的教育学』におけるニーチェへの言及は上述引用文の1箇所だけである。登場回数の少なさもさることながら，登場の仕方も，ヴィネケンの主張する「青年文化」がニーチェの歴史批判＝「無歴史的思想」の影響を受けているということを指摘しただけであり，かなり間接的な言及と言わざるを得ない。理論的教育学の体系的叙述を最重要課題に据えていたこの時期の篠原にとってニーチェの思想は，教育学的に重要とは見なされなかったのである。

5．理論的教育学構築期の篠原助市によるニーチェ受容の特質

このように見てくると，篠原が1922年の『教育辞典』に「ニーチェ」の項目を用意したこと自体が不自然のようにも思えてくるが，これにはいくつかの理由や背景があると考えられる。

第一に，京都帝国大学時代に篠原を指導した小西重直が1917年に論文「ニイツエ（ママ）の学制論」を京都帝国大学編『哲学研究』誌上に発表していたこと，第二に，篠原が1922年『教育辞典』を執筆する際に参考文献（篠原1922-b, 凡例2頁）として用いた1907年公刊のW.ライン編『教育学事典』（第2版）に「ニーチェ」の項目が掲載されていたことである。すなわち，篠原自身の内発的動機の有無にかかわらず，日本においてもドイツにおいても当時ちょうどニーチェ思想に対して教育学的な関心が寄せられつつあったという時代状況が，篠原に「ニーチェ」の項目執筆を決断させる外発的動機づけとなったと考えられるのである。

とくに注目したいのは，1907年公刊のW.ライン編『教育学事典』において「ニーチェ」の項目を執筆したのが，1907年出版の『教育の基礎科学としての美学』（Weber1907-a）の著者として知られるエルンスト・ヴェーバー（Ernst Weber, 1873-1948）だったことである。というのも，ヴェーバーは1922年の『教育事典』の中で篠原自身が芸術教育運動の代表的存在として紹介した人物であるだけではなく[註13]，イエナ大学でラインの指導を受け1906年に学位論文「その世界観と人生観を背景にした若きニーチェの教育学的思想」を提出し，1907年に『その世界観と人生観との関連から見た若きニーチェの教育学的思想』（Weber1907-b）として出版した教育家でもあるからである。すなわち，ヴェーバーは当時のドイツ新教育運動の代表的存在であるだけではなく，青年に悪影響を与えるとの理由から危険視されていたニーチェ思想の教育学的意義を体系的に論じた先駆的存在であり，だからこそ，W.ライン編『教育学事典』における「ニーチェ」（Weber1907-c）の執筆担当者となり，2段組で7頁にも亘ってニーチェの教育学的意義を詳述するという仕事を引き受けることができたのである[註14]。

しかし，ヴェーバーと篠原のニーチェ評を比較する限り，両者間に影響関係を見出すことは難しい。なぜなら，先にも触れたとおり，篠原はニーチェの教育説を「特に独創的と称すべき程のものにあらず」と断じているのに対し，ヴェーバーはニーチェの初期思想に照明を当てつつ「ニーチェの教育学は人格的教育学である」（Weber1907-c, S. 286）と述べ，ニーチェ思想の教育学的意義を高く評価しているからである。分量的にも内容的にもニーチェに対して肯定的評価を示したヴェーバーとは対照的に，篠原は――「ニーチェ」という項目を掲載した一点を除けば――かなり消極的なニーチェ評価に止まっていると言わざるを得ない。篠原にとってヴェーバーは，あくまでも芸術教育運動の代表者であって，ニーチェ論者ではなかったのである。

ヴェーバーとは異なり，篠原がニーチェに対して消極的／否定的な評価を下した理由のひとつは，いわゆる新教育への拒否感に起因すると思われる。篠原教育学が手塚岸衛を中心とする千葉師範学校附属小学校の自由教育運動に理論的支柱を与えたことは周知のとおりであるが[註15]，篠原自身は，千葉師範の自由教育も含め新教育的な動きから常に一定の距離をとろうとしていた。そのような姿勢は，1929年の著作『理論的教育学』の「序」における次のような発言からもうかがえる。

> *「批判的教育学の問題」を公にしてから，早くも大凡七星霜が流れ去つた。此の間，私は一介の教育学徒として，めまぐるしい迄に興つた教育上の新思潮とか革新運動とかに対して，静かに傍観の態度を取つた。教育古典の研究によつて与へられた眼に導かれ，教育的論争の渦に巻きこまれないで，漸くにして，自分の立場を支持し来つた。（篠原1929，序2頁）*

『理論的教育学』の成立経緯をこう説明する篠原は，「時代の潮流に従つてさまよふ教育学は，まさしくは教育学と名づけらるべきでない」（篠原1929，序3頁）とも述べる。自立的科学としての教育学の構築を目指していた当時の篠原にとって，新教育運動はいかにも流動的かつ不安定な潮流に思えたのだろう。それゆえ篠原は，日独を問わず，新教育を謳う流行の思想や運動とは一線を画そうとしたのである。

先述したように，1922年のドイツ留学中にヴィネケンの自由学校共同体を視察した篠原は，ヴィネケンのみならず，エレン・ケイやラングベーン，ラガルデなど，いわゆる新教育運動にニーチェの思想が影響を与えたことを十分に承知していた。しかし，ある特定の教育家にとってニーチェの思想が教育学的意義を有しうるという事実を知りながら，否むしろ，そういう事実を知っていたからこそ篠原は，「めまぐるしい迄に興つた教育上の新思潮とか革新運動」から距離を確保すると同時にニーチェ思想をも遠ざけ，理論的教育学の構築のために「教育的論

争の渦に巻きこまれない」必要があったのである。

全く無視をするわけでもなく，むしろ教育学と直接の関係を持たないニーチェの思想にあえて照明を当てているにもかかわらず，最終的には教育学的見地から厳しい評価を与える――こうしたニーチェに対する篠原の限定的ないし逆説的な評価の背後に何があるのか。もうひとつの要因として考えられるのは，やはり京都帝国大学大学院で篠原を指導し，1918年論文「最近の教育理想」の執筆を勧めた小西重直の存在である。

当時の篠原に対する小西の影響力について，木内陽一は次のように指摘している。「篠原は少なくとも論文を構想するにあたって，小西の著書を参考にした可能性はあるが，その核心においては何ら影響を受けていないといえよう。むしろ後年の教育理想に関する小西の論述は，逆に篠原の影響を受けているように思われる。」（木内1993，109頁）――しかし，篠原が「最近の教育理想」（1918）および『教育辞典』（1922）を執筆している最中の1917年に，指導教員である小西重直が論文「ニイツエの学制論」を京都帝国大学編『哲学研究』誌上に発表した事実は見逃せない。なぜなら，小西はこのニーチェ論の中で，ニーチェの初期思想に見られる教育観を紹介しつつも，概念の不明確さや非現実性などを理由に，最終的には教育学的見地からニーチェ思想に対して否定的な評価を与えているからである[註16]。このような事実を踏まえるなら，「されど其の教育説は特に独創的と称すべき程のものにあらず」という篠原の厳しい評価は，当時の指導教員であった小西重直のニーチェ観に由来していると推測することもできるだろう。『批判的教育学の問題』，『教育辞典』，『理論的教育学』に代表される1920年代の著作執筆時の篠原助市にとって重要だったのは，あくまでも体系的な理論的教育学の構築であって，非教育学的な性質を帯びたニーチェ思想の教育学的な意義を見出すことではなかったのである。

おわりに

以上に考察したとおり，理論的教育学構築期の篠原はニーチェ思想に対して全くの無関心というわけではなかったが，その受容や評価はきわめて限定的かつ消極的なものにとどまっていると言えよう。この時期の篠原は，ニーチェ思想が果たしてどの程度まで教育学的なのかを教育学者目線で厳しく審問し，結果として，後期思想に属する「超人」とは縁を切り，初期思想に散見されるニーチェの教育観についても「特に独創的と称すべき程のものにあらず」という否定的な評価を下した。体系的教育学を構築するというこの時期の課題意識[註17]，生涯貫くと誓った批判哲学[註18]，教育学者としての薫陶を受けた小西重直のニーチェ観――1920年代の篠原助市を特徴づけるさまざまな要因が，非教育学的なニーチェ思想を拒んだのである。

ところが，1929年に『理論的教育学』が出版された翌年，すなわち1930年の『教育の本質と教育学』では一転，ニーチェが「教育者」と評価され，ペスタロッチと肩を並べることとなる（篠原1930，418頁）。こうしたニーチェ評価の変化は，当時の篠原が抱いていた課題意識と無関係ではないだろう。理論的教育学を基盤としつつ実際的教育学への展開を計画していた篠原教育学の確立期において，教育学者の篠原助市は非教育学的なニーチェ思想とどう向き合おうとしたのか。この問いに答えるべく，次稿では1930年代以降の著作群，とりわけ1930年の『教育の本質と教育学』，1935年の『増訂・教育辞典』，1947年の『独逸教育思想史』，1951年の『教育哲学』を中心に取り上げ，ニーチェに関連した篠原の各種発言を詳細に検討することによって，篠原助市の教育学におけるニーチェ受容の特質や意味を明らかにしたい。

【註】

註1 主なものを挙げれば以下のとおりとなる。

・Hoyer, T. 2003: "Höherbildung des ganzen Leibes". Friedrich Nietzsches Vorstellungen zur Körpererziehung. In: Nietzsche-Studien. Bd. 32, S. 59-77.

・Hoyer, T. 2010: Friedrich Nietzsche. In: Zierer, K. /Saalfrank, W. -TH.（Hrsg.）: Zeitgemäße Klassiker der Pädagogik. Leben-Werk-Wirken. Paderborn, S. 140-154.

・Niemeyer, Ch. 2007: Friedrich Nietzsches "Also sprach Zarathustra". Darmstadt.

・Niemeyer, Ch.（Hrsg.）2009: Nietzsche-Lexikon. Darmstadt.

・Niemeyer, Ch.2011: Nietzsche verstehen. Eine Gebrauchsanweisung. Darmstadt.

・Niemeyer, Ch.（Hrsg.）2011: Nietzsche-Lexikon. 2., durchgesehene und erweiterte Auflage. Darmstadt.

・Niemeyer, Ch. 2014: Die implizite Pädagogik in Nietzsches Philosophie. In: Rasegna di Pedagogia/ Pädagogische Umschau LXXII, S. 1-2. u. S.55-72.

・Niemeyer, Ch. 2016: Nietzsche als Erzieher. Pädagogische Lektüren und Relektüren. Weinheim u. Basel.

註2 この分野を代表する研究成果として以下のものを挙げることができる。

・杉田弘子2010『漱石の『猫』とニーチェ―稀代の哲学者に震撼した近代日本の知性たち―』白水社。

・西尾幹二1993（1977）『ニーチェ』第1部，中央公論社。

註3 少なくとも現時点では，相澤伸幸の学位論文『ニーチェと人間形成論―近代ドイツの教育学的人間形成論の系譜において―』（東北大学2002年：未刊行）を除いて，ニーチェ思想の教育学的意義を論じた研究書は発表されていない。こうした研究状況を生んだ原因のひとつは，ニーチェ思想の非教育学的な性格に対する無関心，このようなニーチェ思想を教育学が論じることへの無自覚に求められるのではないか。本研究の出発点には，このような根本的とも言える問題関心が存している。

註4 たとえば，中江らは次のように述べる。「篠原助市は，戦前日本の代表的な教育学者であった。彼は欧米教育学者の数多くの著作を研究し，この中からとりわけ，カント哲学の流れをくむナトルプを選びとり，この立場から教育学界にデビューした。その後も彼は，ディルタイ，シュライエルマッヘル等，ドイツの教育学を摂取し，生涯にわたって教育学理論の構築に努力した。彼が，論文・著作・師範学校用教科書，教育辞典等の執筆によって，当時の教育界及び教育学界に大きな影響を与えたことは疑い得ない。」（中江ほか1982，63頁）また林昌鎬は「西洋の教育学をただ翻訳・紹介するに留まらず，それを批判的に摂取し独自の教育理論を樹立しようと積極的に努力した」点において篠原を評価した（林昌鎬1991，31頁）。木内は篠原を「わが国の教育哲学者の中でも最も深くドイツ教育哲学に参入し，これを自家薬籠中のも

のとして，体系的な教育学を樹立しえた稀有の理論家」（木内1992-a，110頁）と特徴づけ，矢野も篠原教育学のうちに「欧米の教育学のたんなる解釈や咀嚼にとどまらない，日本オリジナルな教育学（教育哲学）の誕生を見るべき」（矢野2014，197頁）と強調する。さらに稲葉は，沢柳政太郎，谷本富，小西重直，吉田熊次，長田新ら，近代日本における代表的な教育学研究者との比較において，篠原教育学の「学問・科学としての体系性と論理性」を高く評価し，「近代日本においては，篠原助市の教育学のみが学問としての組織性をもっていたといわなければならない」（稲葉2004，80頁）とまで断言している。

註5 篠原の留学については，梅根悟1970，林博常1981-dに詳しい。

註6 篠原の活躍ぶりは同時代人からも注目を浴びていたようである。たとえば志垣寛は1927年に出版した『教育界の新人旧人』の中で次のように述べている。「彼は晩学で永らく地方の平教論などをやつてゐたやうであるが，最近東大から，東京高師に，そこから更に東北大学へと，とんとん拍子にのぼつて，今では押しも押されもせぬ教育学界の第一人者，就中新カント派の教育学説を持する急先鋒で，千葉の自由教育の守り本尊，自然の理性化の権化となつて了つた。（…中略…）その鮮な昇進ぶりはたしかに人の目を引いてゐる。」（志垣1927，42頁）

註7 林博常は「教育本質論」という第三のジャンルを設定し，1922年の『批判的教育学の問題』や1951年の『教育哲学』などとともに本書を教育本質論と位置づける。林博常によれば，篠原教育学は「理論的教育学」と「教育本質論」と「実際的教育学」とによって構成されているのである。「彼は教育学の体系を，研究構想の出発時点にあっては理論的教育学と実際的教育学とで組んでいたが，『教育の本質と教育学』を書き上げると，それ以降は教育学の体系を教育学全体系という呼び方をして，教育本質論，理論的教育学，実際的教育学の三者で組むようになった。」（林博常1981-a，86頁）

註8 なお第3編「本邦維新以後の教育」では，ハウスクネヒトによるヘルバルト教育学の輸入に関する言及も確認できる。「明治二十二年文科大学内に教育科特約生を置き，独逸人ハウスクネヒトを聘して教育学を講ぜしむ。是より我が学風次第に英米を去つて独逸に向ひ，ヘルバルトの学説盛に唱へらるるに至れり。」（小川・佐藤・篠原1910-d，254頁）／「学校令時代に於ける学風の変遷は，曾てハウスクネヒト教育学を大学に説きてより以来，ヘルバルトの説は天下を風靡し，教育勅語の精神と相待つて，茲に徳育主義の教育となり，英・仏の学は為に一掃し去られたり。明治三十年以後，社会的教育学説大いに歓迎せられ，ヘルゲマン・ナトルプ・ウイルマン等の説はヘルバルト派個人主義の欠陥を補ひ，近時に於ては更に低能児教育・実験教育・犯罪児童の救済・社会教育等，教育上の特殊問題次第に注意せられ，我が学者亦徒に外人の糟粕を嘗むるを以て屑しとせず，進んで自家独特の学説を建設せんとするに至れり。」（小川・佐藤・篠原1910-d，264-265頁）

註9 この師範学校教科書シリーズの表紙には，小川正行・佐藤熊次郎・篠原助市の順で著者名が記されているが，各著作の奥付を見ると，必ずしも小川・佐藤・篠原の順ではないことがわかる。推測の域を出るわけではないが，実際の執筆者ないし代表著者が奥付の筆頭著者として記されている可能性も考えられるだろう。以下，参考までに，各著作の奥付に記された共著者順を列挙しておく。

・1910-a『教育学』･･･佐藤，小川，篠原
・1910-b『心理学』･･･篠原，佐藤，小川
・1910-c『論理学』･･･篠原，佐藤，小川
・1910-d『近世教育史』･･･篠原，佐藤，小川
・1910-e『各科教授法』･･･小川，佐藤，篠原
・1910-f『小学校管理法』･･･小川，佐藤，篠原
・1912-a『新撰教育学』･･･佐藤，篠原，小川
・1912-b『新撰近世教育史』･･･篠原，佐藤，小川

註10 篠原の1922年著作『教育辞典』よりも早い時期にニーチェを掲載した辞書として，1905年に出版された大瀬甚太郎他編『教育辞書』を挙げることができる。具体的に言えば，ニーチェが掲載されたのは本編ではなく付録「教育家略伝」であり，執筆担当は西山悊治と沼田藤次である。以下，本書におけるニー

チェの項目を引用しておこう。「ニーッ(ママ)チェNietzsche, Friedrich Wilhelm。ドイツの思想家なり。倫理上極端なる個人主義を説き，大に意志の勢力を重んじたり。文章雄勁にして奇才を放ち，一時独逸の文化に異彩を飾りたり。一八八〇年より退隠して専ら病痾を養ひしが，絶えず著作の筆を棄てざりき。その著『ツァラトウストラー』は，我が邦の思想界にも影響を及ぼしゝこと少なからず。(一八四四－一九〇〇)」(大瀬他1905，付録10頁)

註11 林昌鎬は次のように言う。「篠原が留学に出かけた1920年代，ドイツにおける教育学界の主要な関心は，これまで君臨してきたヘルバルト教育学への批判と共に，ディルタイによって読み直された教育の歴史性を強調するシュライエルマッハー教育学への積極的な再評価に向けられていた。ドイツにおけるシュライエルマッハー教育学の主要な研究がこの時期を機にして，それも主にディルタイ学派を中心とする精神科学的教育学者たち(シュプランガー，ノール，リット等)によって行われたということは，そのような真実を裏付けていると思われる。篠原がナトルプから紹介してもらったフリッシュアイゼン＝ケーラーも，ディルタイの弟子の一人で，もちろんシュライエルマッハーを従来の教育学者の中で最も優れた教育学者と見なし，彼の教育学理論を非常に重んじていた人物であった。」(林昌鎬1991，32頁)

註12 福井師範学校附属小学校主事だった時代に篠原が，小川正行，佐藤熊治郎との共著で『教育学』，『近世教育史』，『各科教授法』など師範学校用教科書を執筆していたことは先述したとおりであるが，この共著シリーズはその後も改訂版が続々と編まれ，たとえば1921年には『普通教育学』，1922年には『輓近教育学』が出版された。

まず注目したいのは，『教育学』，『近世教育史』，『各科教授法』など師範学校用教科書の共著メンバーの名前順が1922年を境に入れ替わっているという点である。すなわち，1910年以来一貫してこのシリーズの表紙の執筆者順は，小川正行，佐藤熊治郎，篠原助市であり，1921年の『普通教育学』もこの順序であったが，1922年12月に出版された『輓近教育学』では，篠原助市，小川正行，佐藤熊治郎という具合に，篠原が筆頭著者に格上げされているのである。小川と佐藤がともに1873年生まれ，篠原が1876年生まれということもあってか，従来は年長者である小川と佐藤が篠原の上に名を連ねていたが，1922年に『批判的教育学の問題』，『教育辞典』という2冊の単著を公刊した篠原の教育学者としての業績が高く評価され，名前順の逆転が起こったのかもしれない。1923年の『輓近各科教授法』も1927年の『輓近近世教育史(改訂版)』も，表紙の執筆者順は，篠原，小川，佐藤となっている。なお奥付はそれぞれ，1921年『普通教育学』が佐藤，篠原，小川，1922年『輓近教育学』が佐藤，小川，篠原，1923年『輓近各科教授法』が小川，佐藤，篠原，1927年『輓近近世教育史(改訂版)』が篠原，小川，佐藤の順となっている。

次に注目したいのは，ここでもやはりニーチェが登場しないということである。すでに確認したように，篠原は遅くとも1918年の時点でニーチェに言及し，1922年に出版された『批判的教育学の問題』および『教育辞典』においては自覚的にニーチェの思想を取り上げているが，師範学校用教科書には不適切ないし不要と判断されたのか，それとも共著という制約が関係しているのか，『普通教育学』，『輓近教育学』，『輓近各科教授法』，『輓近近世教育史(改訂版)』のいずれにおいても，ニーチェに関する言及は見られない。それは，楢崎浅太郎との共著『新撰女子教育学』(1921)においても同様である。

註13 1922年『教育辞典』において篠原は「芸術的教育運動 Kunsterzieherische Bewegung」の項目を設け，その中で「又一部の芸術教育論者は，教育の術をも一種の芸術なりとし，教師は其の本質に於て芸術家たるべく，教育の活動は悉く芸術的形式を具備せざるべからずとすら主張す。エルンスト，ヴェーベル Ernst Weberは其の代表者なり。彼は恐く最も極端なる芸術教育論者なり。」(篠原1922-b，208頁)と述べている。参考文献として1907年著作『教育の基礎科学としての美学』も挙がっていることから，篠原がヴェーバーを芸術教育運動の代表的存在と見なしていたことは明らかであろう(篠原1922-b，209頁)。

註14 ヴェーバーによるニーチェ受容については松原2011に詳しい。

註15 千葉師範学校附属小学校を拠点とした自由教育運動と篠原教育学の親近性についてはすでに当時から指摘されていたようである。たとえば渡部政盛は1922年の著作『新カント派の哲学とその教育学説』の中で次のように述べている。「今日，自由教育なる名称を真向に振り翳して，其の講説と宣伝とに従事し

てをるものは，言ふまでもなく手塚岸衛君を中心とする千葉師範学校附属小学校の諸君である。けれども其の基礎となり，背景をなしてをるものは，篠原助市君の思想である。」（渡部1922，175頁）

註16 小西重直は，この時期としては珍しくニーチェの講演論文「われわれの教養施設の将来について」を約20頁にわたり詳述しているが，教育学者の立場からニーチェの教育観を総括する際には批判的な言葉を向けるようになる。たとえば「往々概念や意義が判然しないものもある」と指摘した上で，「所論の骨子ともいふべき『文化』の意味などは極めて不明瞭である」とし，その論述の前提を根本から疑っている（小西1917，66頁）。また「彼【※引用者註：ニーチェ】の攻撃の目標は余りに空漠であつて敵を逸するの感がある」（小西1917，71頁）とし，ニーチェの批判の射程があいまいである点を指摘している。さらに「ニイツエの考方は現代の社会組織の実状と甚だかけはなれたる立論であると見ねばならない」（小西1917，72頁）とし，ニーチェの現代的意義に対しても厳しい視線を向けている。

註17 1937年著作『日本現代の教育学』の中で「篠原助市氏教育学」について同時代的に論評した渡部政盛は，篠原の課題意識を次のように特徴づけている。「篠原氏は，教育学を以て「学」と見る。「学」たらしむる所に研究の目的が存すると見る。春山作樹氏の如くに，術でも学でもどうでもよいなどとは見ない。また，大瀬甚太郎氏の如くに，蓋然的科学などとも眺めない。「学」たらしむるためには，教育事実を理念の上に基礎づけその理念の何たるかを究明するには，批判的方法とか先験的方法とか云ふものを必要とする。この以外に教育学をして「学」たらしむる途がないと言ふ考である。」（渡部1937，211-212頁）

註18 渡部政盛は次のように述べる。「教育学に対する篠原氏の態度は，一言にすれば「批判的」と云ふ点にある。この態度は理論的教育学研究の態度として，氏に在りては一貫して変らざる所である。」（渡部1937，210頁）

【参考文献】

○篠原助市の著作論文（単著）

篠原助市1918「最近の教育理想」尼子止編『最近教育学の進歩』早稲田同文館，45-84頁。

篠原助市1922-a『批判的教育学の問題』宝文館。

篠原助市1922-b『教育辞典』宝文館。

篠原助市1922-c「教育即生活論」教育論叢編集部編『教育即生活論』文教書院，79-116頁。

篠原助市1926-a『教育学綱要』宝文館。

篠原助市1926-b『哲学綱要』宝文館。

篠原助市1929『理論的教育学』教育研究会。

篠原助市1930『教育の本質と教育学』教育研究会。

篠原助市1932-a「民族と教育（特に教育理想としての民族精神）」東京文理科大学教育学会編『教育学研究』第1巻第1号，31-64頁。

篠原助市1932-b「ケルシェンシュタイネルの教育思想」東京文理科大学教育学会編『教育学研究』第1巻第2号，34-70頁。

篠原助市1932-c「ケルシェンシュタイネルの教育思想（承前）」東京文理科大学教育学会編『教育学研究』第1巻第3号，39-82頁。

篠原助市1934『増補・批判的教育学の問題』宝文館。

篠原助市1935『増訂・教育辞典』宝文館。

篠原助市1936『理科教授原論』東洋図書。

篠原助市1937-a『教育と教育的精神』文部省社会教育局。

篠原助市1937-b『国民精神作興叢書』青年教育普及会。

篠原助市1938『教育断想：民族と教育其の他』宝文館。

篠原助市1939-a『教育学』岩波書店。

篠原助市1939-b『シュライエルマッヘル』岩波書店。

篠原助市1941-a『改訂現代教育学』中等学校教科書株式会社。

篠原助市1941-b『改訂近世教育史』宝文館。
篠原助市1942『教授原論：特に国民学校の授業』岩波書店。
篠原助市1943「教育の現実性」日本諸学振興委員会編『日本諸学』第3号，42-64頁。
篠原助市1947『独逸教育思想史』（上・下巻）創元社。
篠原助市1948-a『新教育学概論』富士書店。
篠原助市1948-b『民主主義と教育の精神』宝文館。
篠原助市1949『家庭教育の話』宝文館。
篠原助市1950-a『欧州教育思想史』（上・下巻）創元社。
篠原助市1950-b『訓練原論』宝文館。
篠原助市1951-a『教育哲学』富士書店。
篠原助市1951-b『哲学新講』宝文館。
篠原助市1953『教授原論：学習輔導の原理と方法』玉川学園大学出版部。
篠原助市1987『教育生活五十年』（相模書房出版部1956），大空社。

○篠原助市の著作（共著）
小川正行・佐藤熊治郎・篠原助市1910-a『教育学』宝文館。
小川正行・佐藤熊治郎・篠原助市1910-b『心理学』宝文館。
小川正行・佐藤熊治郎・篠原助市1910-c『論理学』宝文館。
小川正行・佐藤熊治郎・篠原助市1910-d『近世教育史』宝文館。
小川正行・佐藤熊治郎・篠原助市1910-e『各科教授法』宝文館。
小川正行・佐藤熊治郎・篠原助市1910-f『小学校管理法』宝文館。
小川正行・佐藤熊治郎・篠原助市1912-a『新撰教育学』宝文館。
小川正行・佐藤熊治郎・篠原助市1912-b『新撰近世教育史』宝文館。
小川正行・佐藤熊治郎・篠原助市1921『普通教育学』宝文館。
篠原助市・小川正行・佐藤熊治郎1922『輓近教育学』宝文館。
篠原助市・小川正行・佐藤熊治郎1923『輓近各科教授法』宝文館。
篠原助市・小川正行・佐藤熊治郎1927『輓近近世教育史（改訂版）』宝文館。
楢崎浅太郎・篠原助市1921『新撰女子教育学』宝文館。

○篠原助市に関する著作論文
出雲俊江2007「戦前における生活教育論に関する一考察―篠原助市「教育即生活」論の観点から―」中国四国教育学会編『教育学研究紀要（CD-ROM版）』第53巻，13-17頁。
稲葉宏雄2004「篠原助市教育学における「理論的教育学」と「実際的教育学」」『龍谷大学教育学会紀要』第3号，79-102頁。
岩本俊郎1978「篠原助市の教育思想に関する一考察―「自然の理性化」から「個性の歴史化」へ―」『立正大学文学部論叢』第61号，29-49頁。
梅根悟1970「解説・篠原助市とその教育学」篠原助市著／梅根悟編『批判的教育学の問題』（世界教育学選集55）明治図書，219-287頁。
江口潔2001「篠原助市の新教育に対する両義的評価について」『中央大学大学院研究年報』第30号，175-186頁。
大浦猛1975「篠原助市における教育学形成の特質―欧米教育思想摂取の態度を中心にして―」『教育哲学研究』第31号，1-7頁。
柏木正1981「篠原助市の教育思想研究Ⅲ―『教育断想』『教育学』を中心にして―」『関西教育学会紀要』第5号，25-29頁。

柏木正1983「篠原助市の教育思想研究Ⅳ―『教授原論』を中心に―」『関西教育学会紀要』第7号，49-52頁。
木内陽一1992-a「福井県師範学校附属小学校主事としての篠原助市の教育実践について」『鳴門教育大学研究紀要（教育科学編）』第7巻，109-132頁。
木内陽一1992-b「篠原助市のヘルバルト派教育学批判について」『鳴門教育大学学校教育研究センター紀要』第6号，1-8頁。
木内陽一1993「篠原助市の論文「最近の教育理想」（1918年，大正7年）について―本文分析の試み―」『鳴門教育大学実技教育研究』第3号，107-116頁。
木内陽一1994「実験教育学から新カント派哲学へ―明治末年・大正期における篠原助市の外国教育学との取り組みについて―」『鳴門教育大学研究紀要（教育科学編）』第9巻，27-43頁。
木内陽一1995「篠原助市における「実際的教育学」の成立過程―1930年代の篠原教育学に関する覚え書き―」『鳴門教育大学研究紀要（教育科学編）』第10巻，21-43頁。
木内陽一2001「篠原助市教育学と朝永三十郎の西洋哲学史研究」『比較思想研究』第28号，82-89頁。
木内陽一2005「新教育と教育学説の関係を考える」教育思想史学会編『近代教育フォーラム』第14号，107-114頁。
木内陽一2008「学問性と実践志向のあいだ―近代日本教育学の展開―」（第2章第1節）小笠原道雄・森川直・坂越正樹編『教育学概論』福村出版，67-82頁。
北川典子1976「教育の本質についての原理的研究―篠原助市の教育学について―」『中央学院大学論叢』第11号，87-122頁。
髙良ひろ美・石井勉2015「徳育教育に見る日本人の生活における思惟方法―篠原助市の著作に見られる教育と生活の関係性からの一考察―」文教大学生活科学研究所編『生活科学研究』第37集，135-144頁。
小西純1980「福井時代の篠原助市」『関西教育学会紀要』第4号，54-58頁。
駒込武1994「篠原助市の「教育科学」論―教育学説史研究ノート―」お茶の水女子大学人間発達研究会編『人間発達研究』第19号，39-42頁。
志垣寛1927『教育界の新人旧人』教育研究会。
下程勇吉1959『魂の教育者の連峰―近世日本教育史研究―』刀江書院。
田中耕治1979「篠原助市の教育思想研究Ⅰ―『批判的教育学の問題』の時代―」『関西教育学会紀要』第3号，35-39頁。
田中耕治1980「篠原助市の教育思想研究Ⅱ―『理論的教育学』『教育の本質と教育学』の時代―」『関西教育学会紀要』第4号，59-63頁。
田中耕治1981「篠原助市の教育思想研究Ⅲ―『理科教授原論』を中心にして―」『関西教育学会紀要』第5号，30-33頁。
中江和恵・近藤真庸・藤木雅巳・草野滋之1982「篠原助市の教育思想研究―明治以降日本教育学説史研究（その１）―」東京都立大学教育学研究室編『教育科学研究』第1号，63-72頁。
林博常1981-a「篠原助市に関する研究」昭和女子大学近代文化研究所『学苑』第494号，65-87頁。
林博常1981-b「篠原助市に関する研究（2）」昭和女子大学近代文化研究所『学苑』第500号，30-47頁。
林博常1981-c「篠原助市に関する研究（3）」昭和女子大学近代文化研究所『学苑』第503号，37-46頁。
林博常1981-d「篠原助市に関する研究（4）」昭和女子大学近代文化研究所『学苑』第504号，74-86頁。
林博常1982-a「篠原助市に関する研究（5）」昭和女子大学近代文化研究所『学苑』第507号，48-60頁。
林博常1982-b「篠原助市に関する研究（6）」昭和女子大学近代文化研究所『学苑』第516号，41-49頁。
林博常1983「篠原助市に関する研究（7）」昭和女子大学近代文化研究所『学苑』第524号，45-51頁。
林博常1984「篠原助市に関する研究（8）」昭和女子大学近代文化研究所『学苑』第534号，58-65頁。
平野一郎1962「講壇教育学者の教育思想―外国の教育理論の受けとり方と高踏性―」柳久雄・川合章編『現代の本の教育思想：戦前編』（第2章第2節），黎明書房，55-79頁。

福山太一2003「篠原助市の徳育論とその実存性について」『関西教育学会紀要』第27号，11-15頁。
宮野安治1995「篠原助市の教育関係論」大阪教育大学教育学教室編『教育学論集』第24号，63-76頁。
森信明2003「昭和初期教育学説における牧口価値論の特質―篠原助市における価値概念との比較を中心に―」創価大学教育学部編集委員会編『創大教育研究』第12号，61-77頁。
八木浩雄2011「篠原助市のW.vonフンボルト解釈について―フンボルトと「陶冶」の理論の関係を中心に―」『総合社会科学研究』第23号，51-59頁。
柳久雄1973「教育学研究の遺産―篠原助市の教育学について―」日本教育学会編『教育学研究』第40巻　第4号，329-335頁。
矢野智司2014「京都学派としての篠原助市――「自覚の教育学」の誕生と変容」小笠原道雄・田中毎実・森田尚人・矢野智司『日本教育学の系譜―吉田熊次・篠原助市・長田新・森昭―』勁草書房，129-212頁。
米澤正雄2009「篠原助市における教育学理論の形成・展開とデューイ思想受容との関係の解明―永野芳夫の場合との対比を念頭において―」東洋大学アジア文化研究所編『アジア文化研究所研究年報』第44号，28-43頁。
米澤正雄2011「篠原助市における「国民教育」論としての教育学理論の形成・展開とデューイ思想の受容・評価との関係の解明―福井師範時代（一九〇六年四月～一九一二年九月）における「新教育」思想受容と「児童の歴史化」の問題化―」『日本デューイ学会紀要』第52号，1-12頁。
米澤正雄2012「京都帝国大学・同大学大学院在学中の篠原助市における「批判的教育学」確立とデューイ教育思想批判との関係の解明」東洋大学アジア文化研究所編『アジア文化研究所研究年報』第47号，18-39頁。
米澤正雄2014「篠原助市「批判的教育学」と彼の国体観との関係の解明―「自然の理性化」の，「社会による教育・社会の為の教育」としての展開―」『東洋大学文学部紀要（教育学科編）』第40号，145-154頁。
米澤正雄2015「篠原助市は何故に自らの教育規定を転換したのか？―『教育の本質と教育学』（1930）における「理論的教育学」の構想と『理論的教育学』（1929）の論述内容とのズレに着目して―」『東洋大学文学部紀要（教育学科編）』第41号，43-54頁。
米澤正雄2017「戦後における篠原助市「批判的教育学」の再構成―『民主主義と教育の精神』(一九四七年)と『批判的教育学の問題』(一九二二年)とにおける理論上の異同に着目して―」『日本デューイ学会紀要』第58号，97-106頁。
林昌鎬1991「篠原助市におけるシュライエルマッハー教育学受容に関する一考察―篠原の教育本質論における「助成」概念を中心に―」『広島大学教育学部紀要』第1部，第40号，31-39頁。
渡部政盛1937『日本現代の教育学』啓文社。

○その他の参考文献

Hoyer, T. 2002: Nietzsche und die Pädagogik. Werk, Biografie und Rezeption. Würzburg.
Niemeyer, Ch. /Drerup, H. /Oelkers, J. /Pogrell, L. v.（Hrsg.）1998: Nietzsche in der Pädagogik? Weinheim.
Niemeyer, Ch. 2002: Nietzsche, die Jugend und die Pädagogik. Eine Einführung. Weinheim, München.
Nohl, H. 1957（1935）: Die pädagogische Bewegung in Deutschland und ihre Theorie. Frankfurt am Main. Riedel, O. 1914: Nietzsche als Erzieher. In: Führerzeitung 2 Nr. 3. S.66-67.
Weber, E. 1907-a: Ästhetik als pädagogische Grundwissenschaft. Leipzig.
Weber, E. 1907-b: Die pädagogischen Gedanken des jungen Nietzsche im Zusammenhang mit seiner Welt-und Lebensanschauung. Leipzig.
Weber, E. 1907-c: Nietzsche, Friedrich Wilhelm. In: Rein,W.（Hrsg.）: Encyklopädisches Handbuchder Pädagogik Bd. 6. Zweite Auflage. Langensalza, S. 281-287.
大瀬甚太郎他編1905『教育辞書』同文館。
小西重直1917「ニイツエの学制論」京都哲学会編『哲学研究』第16号，56-74頁。
高橋勝1982「F. W. ニーチェ―『自己教育』思想の開拓者―」天野正治編『現代に生きる教育思想 第5巻（ドイツ②)』ぎょうせい，13-47頁。

松原岳行2011『教育学におけるニーチェ受容史に関する研究―1890-1920年代のドイツにおけるニーチェ解釈の変容―』風間書房。

松原岳行2020-a「中島半次郎の教育学におけるニーチェ受容とその特質」『九州産業大学国際文化学部紀要』第75号，113-136頁。

松原岳行2020-b「長田新の教育学におけるニーチェ受容とその特質―生の哲学者としてのニーチェ像の意味―」『九州教育学会研究紀要』第47巻，49-56頁。